

## シンポジウム 「保育臨床の視点から

### 園生活を考える」を終えて

大場 幸夫

私がこの概念「保育臨床」を使用したのは、公には日本教育心理学会第31回総会の小講演（一九八九年）の主題「保育臨床の成立と課題」が初めてのことであった。

それ以前に、この分野を示唆されるような概念を使用する先行研究は見あたらない。自分の専門とする仕事の経緯では、かねてから「教育臨床」という分野が成立していることを知っていたので、その後の自分の研究的関心が、保育現場の問題に絞られるようになって、しばしばこの「保育臨床」という分野の成立を予感してきた。

確かに、自分にとって身近に感じつつまた自分の仕事として手を染めて来もした心理臨床の分野は、保育実践に関係の深いものとして成立していた。とはいうものの、かつての入所施設における心理判定という自分の仕事は、まさに心理検査を子どもたちに施行してその結果の記録をきちんととどめるという繰り返しに過ぎなかった。結局、子どもの24時間を身近にしつつ、実際には検査器具を介しての子どもと向かい合う日々でしかなかった。子どもとのかかわりの薄い出会いに終わらせてき

た。子どもたちから見れば、当時の私は近くにいなから遠い存在であつただろう。

その後保育者の現場の悩みを少しでも軽減し、子どもとのかかわりをよりよい方向に発展させることを実現するために、ともに考え合う時間をもつことを、巡回相談という形で実現できるようにした。その模索を続けてきたこの十五年間の過程で、発想が次第にある方向に定まって来つつあるという実感を、この「保育臨床」に覚えはじめたのである。それは単に心理臨床の応用の場という角度からの保育への接近ではない。保育実践そのものを保育者と語り合うとき、実践がいかに臨床的な意味を有するものであることかと考えさせられ、その意味づけを探してきたのである。

さる五月十六日（土）に、日本保育学会第45回大会企画シンポジウムⅠが開催された。今回のテーマは「保育臨床の視点から園生活を考える」と題している。保育臨

床という概念が使用され当学会で研究発表されたり、こうしたシンポジウムの主題に登場するのは、初めてのころではないかと思う。

ここで、このシンポジウムに話題提供者・指定討論者として参加していただけたのは次の方々である。前原寛氏（鹿児島県、安良保育園園長）、原和夫氏（塩尻めぐみ幼稚園園長）、小川博久氏（東京学芸大学教授）、山崖俊子氏（津田塾大学助教授）。

シンポジウムで話し合われた詳細を、その経過報告の形でここに紹介することではなく、私の主観的な作業として、以下に整理させてもらうことにする。

その場合、現時点では、保育臨床という概念そのものの意味規定について考えることを前提としている。まず第一には、保育者にとって、自らの専門性の中で、保育実践の特質として、この臨床性に気づくことが意味のあるものとなるのではないか、という点に注目したい。この場合、専門の臨床性とは、子どもにかかわる自分のス

タンスの取り方、あるいは自分がどのように子どもの前に存在するのかという点に心を向ける必要があることを意味する。子どもの一番身近な存在であるはずの保育者が、本当に身近に存在する人物かどうか心に心を向けることが大事なことであり、留意されるのである。なぜ保育者の専門性としてこの臨床性に注目する際に、保育者自身のありようが問われるのか。その疑問に対する一つの答えは、子ども自身の潜在的な成長力や治癒力を最大限に高めるためには、子どもの身近な存在としての保育者のありようが大きな影響力を有するからに他ならない。

第二には、いま述べたような臨床の捉え方をすると、園生活における大人の存在と同じく、子どもの集団がもつ臨床的な意味に留意しておきたい。これは今後の興味深い課題として設定できるだろう。たとえば、発育上の問題を指摘される子どもが、保育の場で、周囲の人々の予想を超えるほどの成長を示す事例は非常に多い。どうしてそうなるのかという説明や解釈を抜きに、

子どもが仲間の中にとけ込んでいく過程で、目に見えて他の誰でもないその子らしさを現し始めて、一人の人間存在としての証しを示しはじめる。このような事実の中に、あるいはその園生活の過程において目に見えないメッセージをお互いに感じとりつつ、かわりを深め始める力動的な関係が成り立っているのではないか。そのように考えてみただけでも、その追求の姿勢はまさに臨床そのものであることに気づく。このあたりの考察を深めるためには、子どもの集団そのものの認識を既成の心理学や社会学の概念にとらわれず、子ども同士の力動的な交流そのものを感じ取れる、保育者ならではのスタンスからの発見と考察が待たれるところである。

第三に、心の表現としてのからだへの関心を一層深めることは、それだけでも新しい保育研究の課題であることを指摘できるだろう。保育内容「表現」における子どもの身体性への留意もさることながら、この「からだ」は多義的な含意をもって保育者にメッセージを発信す

る。そのうえ、保育者自身のありようをからだが語るのだとするなら、この時点において、すでに保育における「からだ」は、すぐれて臨床的なテーマを成立させることに気づかされる。からだが語るという表現をここでも用いているが、このあたりの研究的な意義は、早くから心理臨床の分野では注目されていた。にもかかわらず、その方面からさえ残念なことに保育実践に影響を与えるほどの情報になつてゐるとは認めがたい。近年になつて認知科学の研究分野から「からだ」に関する関心を喚起させられる報告が現れるようになってきたが、これもまた保育実践への影響は顕著ではない。本来こうしたからだへの関心は、保育のような実践的な分野でこそ深められていいはずなのである。それが必ずしもそう思えないのは、保育において「からだ」はあくまでも健康・運動という話題の対象でしかなかったためである。保育者にはからだというテーマは限られたものであったことになる。発想を変えることはなかなか容易ではないとい

うことの証しでもある。

第四に、保育者の援助という働きの捉え方を従来よりも深めて広める意義を認めることを指摘したい。この場合、子どもの主体的な活動を支えることに保育者の役割の主眼がおかれるようになって、あくまでもそのような活動を促進するような環境づくりに力を入れることが、保育者の専門的な役割として見直されてきているのである。

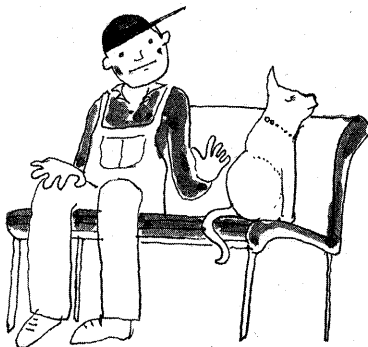
保育臨床という分野を成立させることの意義を認めるには、保育者の援助が他の専門的な役割を担う人たちとは異なる独自の仕事を展開し、しかもその特質において、すぐれて臨床的であることを証明することが必要である。保育実践は、子ども一人ひとりの内的な世界への配慮なしには成立し得ない。その点において、保育は明らかに臨床性の色合いの濃い専門分野の一つとみなしていいだろう。個別的な処遇への配慮といい、自分と子どもとの相互交渉の意義といい、いずれにしても本来の臨

床の姿を実践の中に見出すことは決して困難なことではない。しかも関係の改善による成長促進効果からみても、反対に関係の悪化が子どもの成長の妨害要因であることから、保育実践そのものが臨床的な意味合いの深い分野であることを、ここでも指摘することができる。

つまり、子どもらの発達リスクの主要因を人間相互の支え合いの歪曲や不足に見いだすことができることから、臨床的な対応を保育実践の過程に求めることが当然のこととして認められるだろう。「援助」概念が単に指導から援助に置き換えられたのではなく、保育者の根本的な姿勢そのものの変更になることを確認することが必要である。ヒューマン・サポート、つまり本来の意味を込めて、人間的な支え合いという素朴な営みもまたきわめて臨床的なものである。

第五には、保育実践における日常性の意味の問い直しを指摘しておきたい。この点はシンポジウムの席上、前原寛、原和夫両氏の実践をふまえた話題提供の中でも、

具体的な実例をあげての説明があった。いずれの話題も、日頃のなげない繰り返しあるいは自明のことほど自覚的に捉えにくい、というわれわれの体験と一致する。保育現場のケースカンファレンスや園内研修の課題



協議の場でも、保育者がいちばん自覚化の難しいのは、「何気ない毎日の繰り返し」である。いわゆる日常茶飯事がそれである。どうしたら日常化した知識や通常の感覚、あるいは定常的な思考法などそのものを問題にする気持ちになれるだろうか。近年のエスノメソドロジャー（いわゆる民族誌的方法）とは、われわれの生活のなかで獲得してきた日常的な知識や感性あるいは思考様式そのものを吟味するアプローチであり、一つの新しい保育実践研究法の開拓の可能性を有するものとして期待される。

保育実践の場が、子どもの生きる現場であることは、だれしも認めるところである。かりに、その園が秀でた実践をもって評価が高いと風評がたとうが、あるいは取り立てて強調できるような特別のことを何もしていないと噂されようが、子どもの生活がそこに営まれてきているという事実があることは間違いない。一方では、園児の家柄が喧伝されるような状況に今日でもあるという園

が、「保育の現場」として存続する事実を否定できないことは周知の通りである。他方では、環境の劣悪なために、登園さえ危ぶまれる家庭の子どもの事例が続出する状況にある園の存在することもまた事実である。現場では子どもの生きざまを目の当たりにすることを保育者は避けて通れない。子どもの生きざまを目の当たりにするところに、現場の特質もある。

要するに、日常性への留意とは、その主要な関心事が結局保育者の自覚化の問題として保育者自身のものの捉え方感じ方を問う方向へ向けられることである。日常性の問題に関していえば、自分が突き上げられるように激しいぶつかり合いを経験するでなく、問題を問題とも感ぜずに過ごそうと思えばそうなることは明らかである。家庭が悪いのだから、という結論を下すことで、子どもの園生活へのなじまなさを説明できれば、保育者としての仕事の埒外のこととして、ほとんど意に介さないか、好ましくない子というレッテルを貼ることで済みます。こ

のような保育者の対応が結果的には子どもの園生活を寂しく緊張の強い状況にすることは明らかである。どうあるべきかなどという論議の上に、日々が成り立っていないのだから。むしろ、そのような論議を呑み込んで、どろどろごたごたを現象しつつ繰り広げられるのが、園生活の常であることはいままでもない。それだけに日常性は自明のことであるだけに、その問題性を如何にして自覚するかが問われている。

第六に、連携問題への留意を取り上げておきたい。そもそも連携は、その内容を明らかにする前に、その概念自体を掲げること、了解されるテーマである。親との連携、保育者同士の連携、そして近接領域の専門家同士の連携など一つの保育実践の現場に限ってみても、連携の様相は複雑に重なり合っている。そのことはいかに連携が複雑な現象を示すものであるか、その解決方向もどれほど多様性に富むものであるかを示唆している。山崖俊子氏も自らの実践的な活動へ関与する経験を通して、

心理臨床そのものの考え方を改めつつあることを回想的に語られた。保育臨床を一つの重要な保育実践研究の分野として成立させることと、近接領域でも特に関連機関としての接点の多い心理臨床との連携については、現状からさらに一歩進んで、保育実践のネットワークを構成させてゆく実例としてその内容を充実させていく必要性がある。

第七として、保育者の自己変革に留意しておくことが保育臨床の成立には不可欠であることを指摘しておかねばならない。子どもと日常生活を営む立場に立つ身近な大人は、家庭の親たちの他には保育者しかいない。その場合、子どもと暮らすという毎日のことを、ことさらおげさに考えなくても、日々平安に暮らしていけるだけで十分ではないかという考えもあるだろう。おおまかな意味あいでは考えらるなら、そのような発言に異論はない。けれども、それが子どもの身近なところで営まれる保育者の仕事の現実であるとすると、その点は非常に気になる

り見過ごすわけにはいかない。もちろん実践は保育者一人の力量でまかないきれぬものではない。保育者個人の努力にも限りがある。どうしても保育者たちの協同が基本になる。その協同の形成と運営は、広い意味で人間全体の問題にわたる配慮を必要とする。

ここで、保育現場の人間相互の支え合いを豊かなものにするために、一人一人の保育者が果たす実践的な努力は、まさに臨牀的な営みそのものなのだという考え方をしてみたい。臨牀が本来そういうように、お互いの痛みをわかちあえるような人間の共存の意義を明らかにするプロセスであったのではないか、という指摘は、哲学者中村雄二郎の「臨牀の知」に関する研究からつよく示唆される。臨牀のさまざまな分野の研究とその実践の分野で、専門としての深化拡大の経緯では、その非常に多くの部分において、近代科学における知識に負うところが大きい。そのことによって、中村雄二郎氏の指摘するような近代科学のもつ特質である、普遍主義、客観主義、

論理主義という三つの特徴は、そのまま臨牀の現場ともいうべき保育・教育の現場における子ども理解の主要な骨格を構成してきたとも言えるだろう。好むと好まざるに関わらず、幼児理解・児童理解の主軸は「科学的」という評価信仰に支えられ、現代の人間教育の方向に大きく影響を及ぼしてきたことは事実である。保育者自身の発想を根底から揺さぶるような「知殻変動」がおきるとするなら、近代科学の知へのダウトとしての「臨牀の知」の視点から、実践の見直しをしていくことが子どもに生きる現場においても必要ではないか。

保育臨牀という視点は、保育者のこうした発想の変革と生活革命を可能にする一つのアプローチである。しかもそのことが実践とは遊離したものではなく、実践自体のありようを見直しつつ、子どもの生活と発達を真に支えうる潜在的なキャパシティを園生活に期待できるようにする道である、と信ずるものである。

(大妻女子大学)